

とか便利もあり有効であるかと云ふことと帰着する(國婦意三頁)』

と云ふことが論争の中心であった(即ち婦人部と云ふ特別な機關(この機
関に対する認識も當時不充分であったか)の活動能力及効果如何の全
問題であった。こゝでは抽象論觀念論としてこの中取扱はれ、そして今後の努
力の指向もあり希求であつて問題の根據その過程等上就きは何等提
出されて居るか、次にこの論争の第二の發展は『賛成論と反対論』同一の立
場にあると云ふそれか有効であるかと云ふ機關の此等に関する問題では
亦して特殊な地位と事情の下に置かれて居る婦人に對する組合の特殊任務
を正當に見て居るか否かと云ふ婦人に對する組合の根本的態度の問題
題である』(國婦意三頁)こゝが論議の中心と云つた即ち問題は『労働